

< 論 文 >

国際協力における「緩い」よそ者の役割
— インドネシア・コミュニティ学習活動センターに対する
学生ボランティア活動を事例に —

藤 山 一 郎*

The Role of “Lax” Outsiders in International Cooperation
The Case Study of Student Volunteer Activities toward the Community
Learning Activity Center in Indonesia

FUJIYAMA, Ichiro

In recent years, volunteer activities of international cooperation by student groups are increasing. What type of feature and significance student's volunteer groups have from the perspective of volunteer tourism?

The purpose of this paper is to reveal that even student's volunteer activities as part of volunteer tourism can contribute to improve some problems of host-community in developing countries by analyzing the process of changing relationship between the student group and the host-community through the case study of the community learning activity center in Indonesia.

Keywords : Student Volunteer, Volunteer Tourism, Outsiders, International Cooperation,
Indonesia

キーワード : 学生ボランティア、ボランティア・ツーリズム、よそ者、国際協力、インドネシア

* 和歌山大学国際教育研究センター准教授、立命館大学国際地域研究所客員研究員

1 はじめに

(1) 背景と目的

かつて大学の海外体験学習を検討した拙稿において、国際協力系学生団体の発展途上国におけるボランティア活動は、公的な開発援助やNGOの実施規模にくらべ小規模でありながら、受け入れ地域・コミュニティに対するインパクトは無視できないものである。しかし、学生団体による海外ボランティア活動に関する考察は一種の「空白地帯」となっていると述べた（藤山 2011:126）。それから約5年を経た現在、ボランティア学およびその周辺分野に関する研究が進展するなかで、大学生の国際ボランティア活動に関する論考も増えてきた。それは大学生による国際協力活動が拡大していることの現れともいえよう。

他方、ボランティア研究については、別の視点による進展がみられる。それはオルタナティブなツーリズムと位置づけられるボランティア・ツーリズムである。他者を助ける活動を参加者（ゲスト）と受け入れ側、すなわちホスト・コミュニティの関係の変化やホストに配慮した観光のあり方等が研究対象となり近年蓄積されつつある。しかし、広範にわたるボランティア・ツーリズム研究のなかでボランティア活動の主要な担い手と思われる大学生や学生団体を対象とした論考はまだ少ない。また、ボランティア・ツーリズムに関する議論には、ボランティアにとまなう「労働」や「移動」を肯定的に評価する一方で、後にみるように発展途上国の貧困者や社会的弱者に対する支援内容だけでなく、彼らに対してゲストが投げかける「眼差し」そのものに懐疑的であり、ボランティアの限界を提示する考え方もある。

それでは学生団体によるボランティア活動をボランティア・ツーリズムから見た場合どのような特徴と意義があるのだろうか。本稿では、インドネシアの廃棄物最終処分場の近くにあるコミュニティ学習活動センターにおけるボランティア活動の事例を通じて、学生団体とそれを受け入れるホスト・コミュニティ、すなわち学習活動センターとの相互関係の変化過程に着目する。そしてボランティア・ツーリズムに位置づけられる学生団体が発展途上国の開発課題に貢献しうることを検証し、その特徴や意義を探る。なお、本稿では課外活動として自主的な活動・運営をおこなう学生団体を対象とする。それ故、大学の正課による発展途上国を対象とする「海外体験学習」や「サービス・ラーニング」（大橋他 2015）、そして大学の社会貢献としての「国際協力」（辰巳 2007、萱島 2016）は、共通点も多いと思われるが本稿では対象外とする¹⁾。

(2) 研究方法

「よそ者」という観点からボランティア・ツーリズムおよび学生ボランティアに関する先行研究を整理し、ゲストとホスト・コミュニティの相互関係に関する視点を明らかにする。

また筆者は勤務校にて国際協力系学生団体の「顧問」を担っている。「顧問」としたのは部活動を主管する大学部局において登録された正式な立場ではないが、団体設立から現在に至る

まで筆者が助言、人的ネットワーク・活動地紹介等をおこなってきたからである²⁾。本稿では当該学生団体の活動分野のうち、インドネシアのコミュニティ学習活動センターで活動する班に対する2013年夏季から2016年夏季までの3年間にわたる参与観察と活動ごとに作成される成果報告書、webで公開されているニュースレターからゲストとしての学生団体とホスト・コミュニティに相当するコミュニティ学習活動センターの関係の変容とその意義を評価するものである。

2 ボランティア・ツーリズムと「よそ者」論

(1) ボランティア・ツーリズムの意義をめぐる議論

1990年代後半から欧米でボランティア・ツアーへの参加者が急増したことに応えボランティア・ツーリズムという概念が登場し、2000年代から本格的に研究されるようになった(依田2011:4)。その嚆矢となったのがWearingである(依田2011:4)。依田によればWearingは「自由時間において様々な動機に基づき、社会における物的貧困の緩和、援助、また特定の環境の保護や社会や環境の調査などの組織化されたボランティア活動である」と定義し(依田2011:5、Wearing2001:1)、ツーリストが何らかの奉仕活動をおこなう形態をツーリズムのひとつとして確立した。

2010年までの国内外の研究動向を整理した依田によると、ボランティア・ツーリズムに関する論文で最も多いテーマはボランティア・ツーリスト(ゲスト)に関するもので、中でも注目すべき点として、ツーリストの「利他的な動機」の有無だけでなく、「利己的な動機」の重要性が指摘されている。具体的には、ツーリストの参加前後の比較に基づく自己成長や社会貢献に対する意識や行動の変化などゲスト自身の影響に注目が集まっているという(依田2011:8-9)。そして全体的な傾向としては、「ボランティア・ツーリズムが個人や社会を変える可能性」(依田2011:14)に研究者の関心が強いと指摘する。この場合の個人や社会というのはゲスト本人や属している社会を指しているが、ここで議論が分かれる。ホスト・コミュニティとの交流の欠如、異文化に対する理解不足などを理由にツーリズムでは個人は変化しないと結論と、ホスト・コミュニティとの直接的な相互作用があるため個人は変化すると考える意見である。

薬師寺によればボランティアの原則の一つは利他性であるが、ボランティア・ツーリズムは自己発見や自己成長という利己的な動機が含まれており、自己犠牲をなるべくせずに、楽をして他者に貢献することが含意されているとする(薬師寺2015:281)。また、あくまでツーリズムの過程で何らかのボランティア活動に従事するものであり、内容や期間、技術的力量は問われない。とくに大学生を中心とする青年を対象とするボランティア・ツアーは「安心・安全・快適かつ手軽に貧乏で不幸な孤児に対する教育支援や福祉活動ができる」ことを謳い、商品化

された貧困と不幸をツアー参加者が消費し、それを自己発見や自己成長という形で満足を得る形態は、「新植民地主義」的性格を帯びていると厳しく断じている（薬師寺 2015：281 - 282）。同一の指摘は、依田の論考においても、海外研究者間の議論としてボランティア・ツーリズムは貧困などの社会的問題を根本的に解決するような変革手段ではなく、その場しのぎの解決を提供する「立派な慈善活動」でしかないという議論を紹介している（依田 2011：13、Butcher&Smith 2010）。同じく、Palacios は発展途上国のストリートチルドレン支援の事例を通じてボランティア・ツーリズムの社会貢献手段としての有効性に疑問があると指摘している（Palacios 2010、依田 2011：15）。このような観点からすると、ボランティア・ツーリズムは先進国の考え方にたつツーリストが自分の考えをホスト・コミュニティに押しつけようとしており、結局は新植民地主義を普及しているという見解になる（大橋 2012：13）。

他方、ボランティア・ツーリズムは例えば平和構築の手段や社会活動参加を促進する手段として有効であるとする論考や、特に長期的で「深い」ボランティア活動は参加者に強い影響を与えうることなど、個人や社会に与える影響を肯定的に捉えている（依田 2011：13）。大橋はフィー・ムデーおよびジョンスの論考を整理し、まずボランティア・ツーリストにとってのメリットを3点指摘する。第1は、人間としての発展、第2は多面的文化交流、第3がグローバルな視点の涵養である。これに対して、ホスト・コミュニティ側のメリットは、ボランティア・ツーリズムによって人々が貧困から抜け出せるという考えは射程外の問題であると断った上で、ツーリスト（ゲスト）が落とす資金という経済的メリットがあるが効果的に適切に使用されること、また、ツーリストが安価な労働力として扱われていないことが必要であるという（大橋 2012：14）。

このようにボランティア・ツーリズムは、オルタナティブなツーリズムのあり方として、社会貢献や社会課題の解決と個人や社会の変革という意義をめぐる見解の相違がある。それにもかかわらず、両見解に共通して指摘できることは、個人や社会に発生する変化はゲストだけではない。ゲストとホストの両者間の相互作用によって、ホスト・コミュニティの構成員や社会の変化も発生するという視点である（依田 2011：14）。ゲストの働きかけにホスト・コミュニティがそれをどのように受け止め、どのような作用をもたらしたのか。このようなボランティア・ツーリズムにおける客体ではなく、主体としてホスト・コミュニティの動態を捉えることがゲスト側の個人や社会の変化を理解することにつながる。

(2) 地域づくりにおける「よそ者」の役割

地域づくりにおける「よそ者」を論考する敷田によれば、よそ者を同じ地域や空間内部にいる「関係者ではない異質な存在」としており（敷田 2009:83、敷田 2005）、ボランティアは活動するホスト・コミュニティにおいてまさしく「よそ者」といえる。

それではよそ者はどのような効果を果たすのだろうか。敷田はそれを①地域の再発見効果、

②よそ者による「誇りの涵養効果」、③知識移転効果、④地域の変容を促進する効果、⑤は地域とのしがらみのない立場からの解決案、の5点に整理している(敷田2009:86-89)。①の地域再発見効果は、ホストが日常生活のなかで地域がもつ資源の存在や価値に慣れてしまって気づいていない部分をよそ者がそれを再発見しホストに再認識させる効果である。②の誇りの涵養効果は、よそ者が持つ外部の視点によってホストが有する資源や価値が評価され、それによってホスト自らが地域のすばらしさを認識する効果である。よそ者が地域の持つ価値を評価するには地域に関わり一定時間を有するため、短時間しか滞在しない観光では難しい。③の知識移転効果とは、文字通りよそ者がもつ知識や技術によって、地域づくりにおいてホストが不足しているものを補う効果である。④の変容促進効果は、よそ者が持つ異質性は、地域側に「驚き」や「気づき」をもたらし、それが地域の変容につながる効果である。⑤の地域のしがらみのない立場からの解決案とは、地域が持つしがらみに関わらずにすむが故に、よそ者は優れた解決策をホストに提案できる効果である。

以上はよそ者からホスト・コミュニティに与える効果であるが、発展途上国の農村等のホスト・コミュニティに対する開発援助の場合、公的援助やNGOによる援助問わず、期待された援助効果が現れること、または援助終了後もホスト・コミュニティ内に援助効果が維持定着することが大きな課題となる。この援助効果が定着し維持されるためには、ホスト・コミュニティ側が自身の有する地域資源だけでなく、「よそ者」もひとつの資源としてどのように有効活用しながら自身の発展につなげるかが重要になる(敷田2009:89-90)。この議論をボランティア・ツーリズムに置き換えるならば、ホスト・コミュニティが学生ボランティアをどのように利用し、それを受けた学生ボランティアがどのように変化したか、その相互作用に着目する必要がある。

(3) 「よそ者論」からみた学生ボランティアの特徴

よそ者として学生ボランティアをみた場合、どのような特徴が考えられるだろうか。学生ボランティアの特異性が地域に与えた影響について国内事例を通じて詳細に論考した石野によれば、そもそも学生ボランティアには二重の不安定さがあるという(石野2013:4-5)。ひとつは「ボランティア」である。ボランティアは規則によってコントロールされず、限度が定まっておらず、権限によって管理できないものであり、自由性を特徴とするが故に逆に不安定で十分に期待できない存在にもみえる(石野2013:4)。もう一つの不安定は「学生」である。4年間という短い期間に限定され、身分・立場としても不安定、知識や技術および経験も浅く、中途半端な存在である。学習者として「何のためにボランティアをやっているのか」が(石野2013:5)、より変幻自在に説明可能/不可能であるその移ろいやすさが不安定にうつる。石野はこの二重の不安定さの中に学生ボランティアの特徴を認める。

だが、学生ボランティアは二重の不安定さゆえの強みをもつ。一般的に、ボランティアされ

る側にいる地域住民は、「助けられている」ことへの負い目を抱くとされる。これが学生ボランティアの場合、地域住民は学生を「教えるべき相手」とみなす傾向があるという（石野 2013：8）。学生が「教えられる」立場へと転回することで、地域住民は負い目を払拭する。助ける/助けられるという関係を固定化させない作用がはたらくことによって地域住民は学生から「気づき」を得るといふ（石野 2013：9）。このような作用は「教える立場」として確立し、地域住民もまたそのように認識するコンサルタントや専門家の場合では、問題点や解決法を指摘し地域住民がそれを受け入れる関係が固定化され、「気づき」が創出されにくい（石野 2013：11）。専門性や継続性、実施能力に不安定さや中途半端さの印象がつきまとう「学生」・「ボランティア」の有用性に関する可能性を拓いたものといえよう。

3 国際協力系学生団体によるインドネシア教育支援の事例

(1) 「和歌山 ASEAN プロジェクト (WAP)」のインドネシア班「Cube」の活動地

和歌山 ASEAN プロジェクト (WAP) は 2012 年に設立された団体で、和歌山大学の大学生によって構成される³⁾。大学の海外体験学習プログラムによりタイに渡航した学生が帰国後に結成した⁴⁾。その後、同じくインドネシアを対象とした海外体験学習プログラム (2013 年 3 月実施) に参加した学生が中心となってインドネシアを活動地とするグループが形成され、インドネシア班として WAP の傘下に加わりその名称を「Cube (班)」とした (以降、Cube とする)⁵⁾。2016 年 11 月の時点で Cube は 1~4 回生の計 45 名で構成される⁶⁾。

Cube は 2013 年 9 月の第 1 回から夏および春の年 2 回のペースで同一場所で活動している。その活動対象が西ジャワ州ブカシ市にあるバンタルグバン最終処分場 (ごみ) 地域に建つ「アルファラー学校 (以降、アルファラーとする)」である。バンタルグバン最終処分場はジャカルタの都市廃棄物が文字通り最終的に搬入され処理されるが、実態はオープンランピング (野積み) であり、毎日 6000 トン以上の廃棄物が運ばれ、面積が約 110 ヘクタールにおよぶ広大な「ゴミ山」が形成されている (Hodal2011、中地・藤本 2013：117-118)。このバンタルグバンの廃棄物を回収し生計を立てる人々 (ウェイストピッカー) 2000 世帯以上が周囲に居住しているとされ (Hodal2011)、その子どもが「アルファラー」に通う。

アルファラーは、国家教育省の管轄下にあつてノンフォーマル教育を実施する「コミュニティ学習活動センター (PKBM: Pusat Kegiatan Belajar Masyarakat)」のひとつである。PKBM は民間が運営主体となり、識字教育、9 年間の義務教育を実施する同等のプログラム、幼児のケアと教育、生涯学習をおこなう (ユネスコ・アジア文化センター 2009:14)。アルファラーも 2007 年にブカシ市内の篤志家が財団を設立し運営されている。ウェイストピッカー世帯の多くが住民登録証を保有せず、その世帯の子どもはフォーマル教育を受けることができないという。アルファラーはこのような教育機会が制限された子どもに小学校、中学校、高等学校卒業相当

の資格を与えることができる。

アルファラーの教師数は15名、子どもの数は2014年9月の時点で約220名（幼稚園相当約60名、小学校相当約110名、中学校相当約40名）とされるが、流動性が高く毎月10～20名の変動があるという⁷⁾。このため継続性のある授業運営とは言いがたい状況である。授業費は無償で、教科書は学校が保管し利用時は共同利用である。教師の多くが高校卒業であり教育の質をさらに高めていくことも求められている⁸⁾。

ウェイトピッカーの収入は回収量に依るため、回収作業に加わり家庭内における重要な労働力として従事する子どもも多数いる。それがアルファラーの流動性の高さの理由のひとつであり、かつ年少期から収入を得る経験をすることで学習よりも現金収入を得ることに傾倒する。そのことが学力向上の停滞につながる循環構造が形成されている⁹⁾。

(2) Cubeの活動概要

Cubeは前節のウェイトピッカー世帯の生計構造や子どもの学習課題をふまえ、アルファラーを拠点に、「子ども」、「教師」、「保護者」の三者を対象者とした¹⁰⁾。三者の「夢の選択肢が広がるアクションを起こす」ことを目的とし、学生による独自企画が形成される。

Cube内には班長、副班長、班内会計担当が班幹部となり、その下に前回活動時の総括をおこなった後に一度各企画のグループは原則的に解散する。そして次の現地活動企画をCube全体で検討する。この時に企画の継続性を重視するもの、単発で実施するもの、三者の対象者のバランス、参加学生のマンパワー等を配慮しながら企画骨子が形成され日程表に配置される。各企画骨子が決まる頃に幹部はメンバーに希望を募り再び企画ごとのグループが形成され、グループごとに企画の詳細について準備がおこなわれる。その進捗状況は週1回開催するCube全体の会議で提案や進捗報告がなされる仕組みになっている。

渡航日程は、毎回を通じて10～13日間程度となっている。表1では2016年9月の第7回

表1 現地活動スケジュールの一例（第7回）渡航期間：2016年 9月3日（月）～11日（日）

	午前	午後
9月3日(土)	日本出発	夜ジャカルタ到着
9月4日(日)	ジャカルタ観光	ジャカルタ観光
9月5日(月)	ダルマ・プルサダ大学とのミーティング（大学教室）	
9月6日(火)	創造性（紙芝居）企画	創造性（紙芝居）企画
9月7日(水)	サッカー企画	サッカー企画
9月8日(木)	書道交流企画	記念植樹企画
9月9日(金)	ダルマ・プルサダ大学とのフィードバック（大学教室）	
3月10日(土)	日系企業工場見学	
3月11日(日)	現地解散（帰国組・第三国移動組）	

（2016年9月WAP-Cube活動報告書をもとに筆者作成）

の事例をとりあげているが、移動日1日、観光（一部活動に必要な物資調達を含む）1～2日、現地パートナーのダルマ・プルサダ大学生とのミーティング1日、アルファラー現地活動3日、ダルマ・プルサダ大学生とのフィードバック会議1日、観光または見学等1日、移動日1日という日程で他の回もほぼ同様である¹¹⁾。また、表1では分かりづらいが現地大学生との交流要素も含まれる。アルファラーにおけるボランティア活動だけでなく、観光や見学も含まれた複合的な構成であることが分かる。

これまでに実施した企画数は、表2から全24企画である。企画分野別では、文化紹介・文化交流企画が5回、教育企画が7回、菜園企画が6回、食育企画が3回、運動企画が2回、その他1回となっている¹²⁾。また、企画の対象者は、子ども対象企画12企画、教師対象企画11企画、保護者（主として母親）対象企画7企画となっている¹³⁾。

(3) 菜園企画における変化

ここではCubeの諸活動のうち菜園企画の変遷から学生とアルファラー教師との相互関係の変容を追う。Cubeの各回の活動報告書から菜園部分の内容と結果をまとめたものが表3である。

①第2回活動

菜園企画は第2回からはじまった。これは第1回渡航時に校内を見学し、ミニ菜園らしきプランターが存在していることを確認し、帰国後にこれらの有効活用と食育につながる教育的意義を理由に実験的に企画されたものである。現地では観賞用としてひまわり、食材利用可能な空心菜の2種類を教師に企画趣旨を説明した後に学生と子どもが作業をおこなった。しかし、

表2 Cubeの活動経歴

時期	活動内容（主たる対象者）	派遣人数
2013年9月 第1回	①日本文化紹介（子）、②日本食紹介（子、母、教）、③ミニ運動会（子）	6人
2014年3月 第2回	①ロケット実験（子、教）、②菜園（教）、③食育（母）	5人
2014年9月 第3回	①教育調査（教）、②菜園（子、教）、③食育（母）	9人
2015年3月 第4回	①教育（子）、②日本文化紹介（教、母）、③菜園（子）、④創造性（アート）（子）	6人
2015年8月 第5回	①創造性（フォトコンテスト）（子）②菜園調査（教）、③文化交流（教、母）	5人
2016年3月 第6回	①創造性（カップス）（子）、②菜園（教）、③食育（母）、④文化交流（教、母）	7人
2016年9月 第7回	①創造性（紙芝居作成）（子）、②サッカー（子）、③文化交流（母）、④記念植樹（教）	13人

(2016年9月WAP-Cube活動報告書より抜粋)

帰国後しばらくしてから現地パートナー大学生に途中経過を確認させたところ、大半が枯れていることが確認された。

②第3回活動

そこで、第3回企画の検討において、菜園企画の継続を確認し、現地の気候に適した植物を調べ、子どもを直接対象とする企画を実施した。実際に4種類の植物をプランターに植え、また子どものやる気を喚起するための風車製作や家庭で栽培を促すペットボトルプランターを製作させた。栽培管理のために手作りのカレンダーを子どもに提供し計画性を涵養することもおこなった。

③第4回活動

ところが、途中経過報告にて発育不良ないしは枯れていることが判明し、Cube側は次回菜園企画について検討する。3回目に植えた4種類の植物はインドネシアの気候に適する種類であることを重視しネット等で調べた結果に基づいていた。そのため子ども、あるいは教師にとっても分かりづらいものであった。その反省にたち、インドネシアでは日常的に食する理解しやすい植物として唐辛子(チャベcabe)ときゅうりの2種類を第4回時に植えることとした。さらに、子どもを対象とし、手作り紙芝居、当番表、カレンダーなどを利用して栽培管理方法とやる気を維持できる工夫をした。カレンダーは、その日の作業が完了すればシールを貼って視認することで小さな達成感が得られるようにした。

④第5回活動

しかしこの方法でも栽培は改善されていないことが報告された。後に判明したが、プランターごと移動され、カレンダーなども実施当初は利用されていた痕跡があるものの途中から利用されていなかった。もともと第4回の菜園実施後に栽培がうまく進んでいないことが確認できた場合には、栽培そのものを停止してアルファラー側と話し合うことをCubeは想定していた。

こうして第5回の菜園企画は調査として教師を対象に会議をおこなうことになる。議題は第4回で植えたきゅうりと唐辛子が枯れてしまった原因、継続可否に関する教師側の意見、継続する場合の植物の種類等を聞き取ることであった。その結果、第1はCubeから持ち込まれた植物は全般的に環境に適さない(必要とする水量、気温など)、第2は断食明けの長期休暇など社会的理由による栽培管理の限界、以上の2点を教師から指摘された。

しかし同時に以下の発言もあった。Cubeの菜園企画を受けて、(a)菜園を授業のひとつとして組み込むことになり、(b)1名の教員が菜園担当になったこと、(c)教室内の高温を和らげるために現地環境に耐性のある植



(写真1 2015年3月のアルファラーの校舎)

表3 菜園企画の変遷と結果

活動回	対象者	菜園企画内容	実施結果・次回対策
第1回	無	実施無し（ただし、敷地内の一部に複数のプランターがあることを確認。）	菜園企画の開始
第2回	教師 子ども	教師に対して菜園を継続的に実施する意思の有無を確認する。 予備実験としてひまわりと空心菜の種子をプランターに植えて栽培方法を教師に伝える。 栽培の経過確認をするためにアルファラーに訪問して写真データを送ることをブルスだ大学生に依頼。	大半が枯れていた。 (次回対策) 現地に気候に適した植物を再度植える。 子どもを直接対象にする。
第3回	子ども	4種類の植物を子どもとともに植える。 栽培を通じて計画性を学ぶことをねらいとして記入式のカレンダーを子どもに提供する。 ペットボトルを利用して風車と簡易プランターを子どもに製作させた。	発育不良ないし枯れていた。 簡易プランターは家庭持ち帰りなので利用状況を確認できず。 (次回対策) 現地で日常的に食される身近な植物を植える。 栽培・管理方法の教え方に力点を置く。
第4回	子ども	紙芝居を用いて植物の栽培方法を子どもに教える。 プランターにきゅうりと唐辛子の種子を植える 当番表、水やりカレンダーを作成し、子どもが責任をもって栽培することを促す。	きゅうりと唐辛子のプランターが行方不明（聞き取りの結果全て枯れたことが判明）。水やりカレンダー、当番表も利用されなかった。 (次回対策) 直接栽培することを停止し、継続可否について教師と意見交換をする。
第5回	教師	菜園に関する意識調査 植物が育たない原因に関する聞き取り アルファラーの菜園活動に関する聞き取りの結果、以下の3点が判明。 ・Cubeの菜園企画を受けて、ライフスキルの授業として菜園を組み込む。 ・現地の食文化と気候に適した植物を栽培する。 ・実を飲み物にできる植物（グラスジェリー）を校舎の周囲を囲むようにして栽培し、グリーンカーテンを形成する。	菜園企画の継続に関する模索。 (次回対策) 教師側の要望について再度意見交換する。
第6回	教師	菜園に関する意識調査 教師に菜園マップの作成をしながら聞き取りした結果、グリーンカーテンが急速に進展していることを確認。グラスジェリーを使ったドリンクも完成。後は甘さを足すためのシロップをパッションフルーツからつくることを実験していることが判明した。パッションフルーツも敷地内で栽培。今後ドリンクを販売していくことを検討。 教師から Cube とアルファラー間の友好を示す記念植樹を提案される。	アルファラー教師が菜園を主導的に展開していることを確認。Cubeとして企画完了を確認。 (次回対策) 記念植樹の共同実施。
第7回	教師	敷地内に記念植樹を実施。樹木をアルファラー、プレートに Cube が負担。	菜園企画の終了。

(Cube 第1～7回までの活動報告書、Web用ニュースレター、会議議事録に基づき筆者作成)

物を校内に張り巡らすことで校内をグリーン化すること、(d) その植物の実を利用したドリンクをつくること、これらが表明された。そして、教師側から引き続き Cube に栽培を促進する方法やドリンクの販売に関する支援が要望された。教師側の要望を受けて、Cube は次回活動に向けて検討すると返答した。



(写真2 2016年9月のアルファラー校舎)

⑤第6回活動

Cube は帰国後、第6回の菜園企画について「栽培」「授業（ライフスキル）」「加工（ドリンク）」「販売」に区分して検討する。このうち「栽培」と「加工」は Cube として貢献が困難と判断した。残りの「授業」「販売」まで絞ることができたものの、教師のニーズの真意に確信が持てない部分と、特に「販売」に関して Cube の能力不足があることから決めあぐねた。このため第6回においても教師との意見交換の場を持ち、詳細なニーズを確認することになった。

こうして第6回では、校内の菜園マップを教師側に作成してもらいながら、今後の展開や Cube への要望を聞き取りした。校内のグリーンカーテン化はほぼ完成状態（写真2）であり、子どもに対する栽培授業も行われているとの発言があった。ここでは校内で栽培するパッションフルーツのシロップへの加工方法、および将来の販売に向けた支援が改めて Cube 側に要望された。他方で、栽培にかかわる点に関する要望はなく、販売面では子どもに職業訓練の一環として授業に組み込み、ドリンクおよびシロップは校内関係者への提供から始めて徐々にそれ以外に販売を拡大していく計画との回答を得た。さらに、教師側から Cube とアルファラーの友情の証として果樹の記念植樹をしてはどうかとの打診を受けた。

⑥第7回活動

会議の結果を受けて Cube 内で菜園企画の継続について検討した。その結果、(a) 菜園企画当初の趣旨から鑑みると目的がほぼ達成されていること、(b) 加工・販売部門に関するサポートは Cube がやはり能力不足であること、との理由により基本的に終了することを決定した。そして、教師の提案を受け、菜園企画の一定の完成という意義を含めて記念植樹をアルファラーと共同で実施することになった。第7回活動では予定どおり記念植樹をおこない、アルファラーから Cube に対する感謝のことが述べられた。Cube 側は今後もアルファラーに対する協力と交流を継続することを確認した。

4 学生ボランティアによる開発効果

(1) 菜園企画の変遷からみる学生ボランティアの特徴

第2回から第7回におよぶ Cube の菜園企画からは、以下の特徴が指摘できる。

第1は、継続性である。アルファラーの活動日数は各3日間でそのうち菜園は1日間の企画であるが、Cube は組織的な運営と過去の蓄積を踏まえながら単発的な企画だけでなく菜園企画のような継続性のある企画を形成している。第1回においてアルファラー敷地内の片隅にミニ菜園らしきものを確認したところから企画された。そして第2～4回までがそのスペースを利用したプランター菜園を実際に実施したが、第5～7回は教師との意見交換会と記念植樹のみと変化しつつも菜園企画として継続した。

第2は、目的の未達成である。学生が企図した菜園の主軸となる植物の栽培について、子どもまたは教師が開花させる、実を結ばせる、維持するという成果にはほぼ至らなかった点である。つまり少なくとも植物の栽培はほぼ失敗したといってよい。このような目的の未達成は、開発援助に携わる専門家やコンサルタント、NGO スタッフによる援助でさえもあってはならないというのが前提である。例えこのような失敗が想定外の原因によって発生したとしても度重なる失敗はプロの世界では致命的なものになりかねない。また、ホスト・コミュニティからすればゲストに対する不信感の発生につながる結果ともなる。

第3は、自主性である。翻ってみれば度重なる失敗にもかかわらず、その原因を考え試行錯誤しながら学生は菜園企画を維持したことになる。このことは上から管理されることなく彼らの自主性が認められる学生ボランティアの特徴といえよう¹⁰⁾。これが公的援助であれば計画の抜本的見直しや中止にもなり得る。また、ボランティアであっても、NGO 等主催団体によるボランティアの場合はその指示に従うことが求められ、失敗しないボランティア内容が予め用意されるのが前提である。失敗につながるボランティア内容を継続することは困難であろう。Cube は WAP 傘下とはいえ WAP 自体が学生団体であり、外部に NGO 等の上部組織がなく、学生自身で実施可否、継続可否を決めることができる。

ただし、学生「だけ」で決めてしまうことは、ホスト・コミュニティや周囲の状況を配慮せずに一方的に決めることもあり得ることも意味する。その姿勢如何で新植民地主義として批判される性格を帯びることにもつながる。

(2) 学生ボランティアとアルファラー教師の相互関係

それでは Cube はアルファラーの企画内容を一方的に決めているのか。これまで企画形成過程を追っていくと、植物栽培の失敗という誰もが分かる結果を招いている。このことを契機に両者の関係性が変化する。その変化を各回報告書およびそれらをまとめた表3に基づいて Cube 学生の視点とアルファラー教師の視点に区分して述べる。

まず Cube 学生の視点は以下である。第2回こそ教師に予備的実験として菜園の管理について説明するものの作業自体は子どもがおこない、その後も第3回、第4回にわたり子どもが対象となった。しかし、教師でも子どもでも栽培はうまくいかなかった。学生にとってはその失敗がショックであり次回こそは成果を得るべく、専門家やダルマ・ブルサダ大学生、ネット情報といった様々な情報源にあたった。しかし次回も継続実施という結論に至るまでは、葛藤もあり時に企画中止も検討された。栽培に必要な道具、栽培方法や管理の仕方、子どもには楽しく栽培できるような工夫を伝えてきたにもかかわらず、教師や子どもの「やる気」や、変化への手応えを感じられなかった。その現実をつきつけられるなかで彼らが気づいたのは「植える」という眼に見えるものだけに依存していてもアルファラー側には伝わらないこと、アルファラー側の真意がどこにあるかが不明であることを実感するようになった。そこで子ども対象ではなく、教師との意見交換会を開き、双方が考えていることや真意を理解しあうことに方針を転換した。それが第4回までの内容と第5回からの違いである。そしてその意見交換会で初めて教員の計画と意気込みを知らされることになった。それは学生の想定を超えるものであった。

第4回の報告書には、学生が以下のように述べている。「今回、先生達と会議を行ったが、最も意外だったのが想像以上に先生達が菜園に対して熱意をもっていたことだ。過去3回の菜園企画はどれも失敗に終わったという印象を受けていたが、その企画により、先生達やアルファラーに影響を与えることが出来ていたという事を知れたのは今回の大きな成果である（以下省略）。」さらに、「先生達の意見を聞くことも非常に大切だと実感した。アルファラー訪問時は、つい企画の運営に必死になってしまいがちである。しかし、先生達の企画への理解や総括を聞くことは、アルファラーでのニーズや先生達との連携を図る為に不可欠であるのではないかと（以下省略）。」と結論づけている（以上の引用は記述のまま）。

他方、教師の視点を彼らの発言内容からまとめれば以下になろう。第2回から第4回まで学生が毎回提供してきた植物は、よく分からない植物、気候に適さない、そして小型かつサイクルの短いもので管理が難しい、総合的にみてアルファラーには適さないものであったので、成果につながらなかった。しかし、学生は子どもたちに菜園を教育の手段として利用することを示していた。第4回以降に、菜園の有用性を認め、担当教員を決めて授業の一環として組み込み子どもに育て方や水管理の大切さを伝え、植物を育てることに少しでも興味を持たせることになった。植物の種類は環境に適するものであり、栽培から加工食品（ドリンク）、そして販売を可能にする植物であり、校庭の周囲に植えてグリーンカーテン化する方針をたてた。その植物は子どもとともに植えることにした。第5回時に学生から菜園の方針について意見を求められたので、すでに決めていた方針を学生に伝え、ドリンク加工や将来の販売促進に必要な技術や知識を求めることにした。そして、記念植樹を実施することを学生に対して、学生も希望するならば、という前提で提案した。

「失敗の連続」によって、学生は対象を子どもから教師に移して、教師とのコミュニケーションをはかりながらニーズや意思を確認し、それを企画に反映していくことの重要性を認識した。対して教師は「失敗の連続」の中から、学生の試みに対する菜園教育の有用性に気づき、さらにその気づきは植物そのものの活用へと発展した。こうして短期間のうちに校内のグリーンカーテン化、加工食品の販売可能性にまで広がった時には、両者の関係性は「学生主導の菜園」から「教師主導の菜園」へと転換した。

以上の考察から、団体や個人の変化はボランティア学生にだけ生じるのではなく、アルファラー側にも生じていることが見受けられる。特に、教師はボランティア学生のなすがままにされず、むしろ有用なよそ者として利用している姿が浮かび上がる。

(3) 「緩い」よそ者とボランティア・ツーリズム

Cubeによる学生ボランティア活動は、全体を見渡すと、Wearingが指摘するような目的をもったボランティア活動を主軸としながら、さらに通常の観光もともなっておりボランティア・ツーリズムの範疇に含まれる。活動対象となるアルファラーからみると、学生は毎回3日間、しかも日中のみアルファラーの空間内部にいる「関係者ではない異質な存在（ゲスト）」、すなわち敷田のいう「よそ者」である。そしてゲストを受け入れるアルファラーは、ホスト・コミュニティとして位置づけられる。

ただし、よそ者といっても、専門家やコンサルタントとしてのよそ者から仲介者が用意した体験メニューをこなすだけのよそ者に至るまでその幅が広い。そのなかで本稿の事例であるよそ者とそのグループは、活動資金が少なく、専門的な技術や知識、経験を持たないことに加え、変幻自在な大学生特有の性格を有するよそ者、いわば「緩い」よそ者といえよう。

ボランティア・ツーリズムにおける緩いよそ者は、より一層利己的動機に傾きがちであり、ホスト・コミュニティとのコミュニケーションが希薄な中、その場しのぎの浅い解決を提供する者にみえる。Cubeもただちにアルファラーや子どもに大きな悪影響を与えるものではないと思われるが、菜園企画として植物の種類や方法を相手に押しつけたと言えなくもない。しかし、ホスト・コミュニティたるアルファラーの対応は表面上では「枯らす」という消極的反応を示しつつ、水面下では緩いよそ者に刺激されながら自発性が喚起されることとなった。よそ者の緩さゆえに急速な変化に惑わされず強要されず、ゆっくりとそのホスト・コミュニティ自体のペースで対応していく余裕ができる。ホスト・コミュニティは大学生という緩いよそ者に極度の負い目を感じず、むしろ優位的な立場を保持していることが第4回から第5回にかけての変化が発生した原因と言える。このようにみると、ボランティア・ツーリズムの理論と実践において、学生ボランティアの可能性を検討する余地が十分あることが指摘できるのである。

5 おわりに

本稿は、国際協力分野の学生ボランティアをボランティア・ツーリズムのひとつとして位置づけ、ゲストとホスト・コミュニティ相互の変化と成長を「よそ者」論から分析したものである。筆者が参与観察した事例からは、国内の学生ボランティア事例を研究した石野と同じく（石野 2013）、海外においてもよそ者としての学生ボランティアはホスト・コミュニティとの間で、働きかけとその受け入れをめぐる相互関係の中で両者が「気づき」を得て変化しうることが明らかになった。ただ、学生ボランティアによる働きかけ方が失敗であったとしても、ホスト・コミュニティはそれを致命的なものとして受け止めなかった。そこから双方の気づきと変化が始まったのである。つまり、国際協力の現場における「緩い」よそ者の可能性を検討する必要があることを示唆している。

また、ボランティア・ツーリズムの議論の多くが、参加者（ゲスト）の利己的動機や変化、それが社会に与える影響に関心を寄せる中、本稿ではホスト・コミュニティもまた主体的に変化し、それがゲストの変化に影響をおよぼす可能性があることを明らかにした。ボランティアはゲストだけが実践しているのではなく、多くのホスト・コミュニティもまたゲストの受け入れというボランティアを實踐している。本稿は一事例を取り扱ったに過ぎないのであり、ボランティア・ツーリズムの議論を発展させるためには、ゲストとホスト・コミュニティの関係性についてより一層の精緻化が必要となろう。

注

- 1) 国際協力分野のサービス・ラーニングに関する論考は、大橋他 2015、藤山 2011 などを参照。大学の社会貢献としての国際協力活動については、辰巳 2007、萱島 2016、藤山 2009 などを参照。
- 2) ただし、勤務校の協働教育センターに学生の自主的創造的科学的活動を促進・支援することを目的とした通称「クリエ活動」制度があり、当該学生団体はこれに登録している。希望する学生には単位認定があり、その場合筆者は指導教員という立場になる。
- 3) 設立時は 20 人に満たなかったが、2016 年 11 月時点で約 100 名の学生で構成されている。
- 4) そのため WAP として最初の国際協力活動は 2013 年夏季から実施したタイの障がい児教育支援（車イス提供および交流活動）である。その後もタイ班（TIES）が毎年 1 回現地で活動を継続している。
- 5) タイおよびインドネシアの海外体験学習プログラムは共に筆者が担当・現地引率をしており、帰国後も継続してタイおよびインドネシア等に学生主体の国際協力活動が実施できる受け皿として WAP 設立を促した。現在 WAP は幹部会のもとにタイ班（TIES）、インドネシア班（Cube）の他、国内で活動する 2 班の計 4 班で構成される。WAP そのものが学生ボランティアにおける研究対象として興味深い、これについては別稿にゆずりたい。
- 6) 他に Cube には 1 名の博士課程後期課程の大学院生がアドバイザー的な役割で所属している。インドネシアの留学経験とボランティア活動経験を有し、現在も研究フィールドとして現地事情に精通していることから Cube の活動や運営に関して助言している。
- 7) 2014 年 9 月現地活動時の学生による教員インタビューに基づく。
- 8) このため財団は希望する教師に通信教育による大学卒業資格を得るための奨学資金を提供する等の努力がおこなわれている。

- 9) ウェイストピッカー 1 名の 1 ヶ月当たりの収入は約 80 万ルピア (約 8000 円相当) であり、家族内で両親、子どもが従事すれば十分とは言えなくも生計は維持できる。
- 10) 2013 年 9 月に実施した第 1 回現地活動のフィードバックから Cube メンバー間で今後の方針について議論した結果である。(2014 年春季第 2 回活動の成果報告より：http://www.wakayama-u.ac.jp/ier/file/140625_Indonesia_WAP.pdf 検索日 2016 年 11 月 22 日)
- 11) パートナー大学とは、ダルマ・プルサダ大学人文学部日本語学科の学生である。1 回目の渡航時に交流会を実施した。第 2 回渡航以降、プルサダ大学生の有志グループとともに共同で現地活動をおこなっている。
- 12) 第 5 回～第 7 回までの創造性企画は、児童・生徒を対象にしながら教育手法を教師に紹介する目的も含まれるので教育企画に分類した。また、後述するが菜園企画の継続を契機として第 7 回の植樹が実施されたので菜園企画に分類した。
- 13) 対象者が複数にまたがる企画もあるので全 24 企画を上回る。
- 14) ただし、厳密に言うならば顧問である筆者が Cube の企画内容のチェックを行っており、完全なフリーハンドではない。しかし、学生の主体性を可能な限り認めている。この学生ボランティアに対する指導、管理等に関しては別稿で検討したい。

<引用・参考文献>

- Butcher, J., & Smith, P. (2010) "Making a Difference: Volunteer Tourism and Development", *Tourism Recreation Research*, 35 (1)
- Hodal, Kate (2011), "Living off the landfill: Indonesia's resident scavengers", *the guardian*, 27 September 2011, (www.theguardian.com/world/2011/sep/27/indonesia-waste-tip-scavengers, 検索日: 2016 年 11 月 21 日)
- Palacios, Carlos M., (2010) "Volunteer tourism, development and education in a postcolonial world: conceiving global connections beyond aid", *Journal of Sustainable Tourism*, Vol18, No.7
- 石野由香里 (2013) 「『学生ボランティア』の特異性が地域に対して有する潜在的な機能～ボランティアをする/される関係をズラす効果が地域の場づくりへ与えた影響～」、『生活学論叢』、第 23 号
- 乾美紀・悌穂乃香 (2015) 「学生団体による国際教育協力の可能性～ラオス教育支援団体の活動に着目して～」、『国際教育協力論集』、第 18 巻第 1 号、広島大学教育開発国際協力研究センター
- 大橋一友他 (2016) 「海外体験型教育プログラムのつくり方: 大阪大学グローバルコラボレーションセンターの経験から」、『大阪大学高等教育研究』、第 4 号
- 大橋昭一 (2012) 「ボランティア・ツーリズム論の現状と動向～ツーリズムの新しい動向の考察～」、『観光学』、第 6 号
- 萱島信子 (2016) 「日本の大学による国際協力への参加に関する研究～1990 年代以降の工学系高等教育協力を事例として～」、『国際開発研究フォーラム』、第 47 巻第 4 号
- 敷田麻実 (2005) 「よそ者と協働する地域づくりの可能性に関する研究」、『江渟の久爾』50 号
- 敷田麻実 (2009) 「よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究」、『国際広報メディア・観光学ジャーナル』、第 9 号
- 辰巳佳寿子 (2007) 「大学の『社会貢献』に関する一試論: 理論と実践の狭間で～バングラデシュ農村開発実践研究を中心に～」、『大学教育』、第 4 号、山口大学
- 中地重晴・藤本延啓 (2013) 「インドネシアの廃棄物処理の現状と課題」、『海外事情研究』、第 40 巻第 2 号
- 藤山一郎 (2009) 「大学による国際協力事業展開の要因～ODA の国民参加と大学の『第 3 の使命』～」、『立命館国際地域研究』、第 30 号
- 藤山一郎 (2011) 「海外体験学習による社会的インパクト～大学教育におけるサービスラーニングと国際協力活動～」、『立命館高等教育研究』、第 11 号
- 藤山一郎・間中光 (2016) 「復旧・復興過程における学生団体による国際協力活動の可能性～インドネシア・ジャワ島地震 (2006 年) を事例に～」、『和歌山大学防災研究教育センター紀要』、第 2 号
- 薬師寺浩之 (2015) 「海外孤児院 ボランティアツアー参加者の経験と開発途上国に対する印象に関する考察」、『立命館大学地理学教室編『観光の地理学』、文理閣
- ユネスコ・アジア文化センター (2009) 『平成 20 年度公民館の国際発信に関する調査研究～海外のコミュニ

ニティ-学習センターの動向にかかる総合調査研究報告書（文部科学省委託事業）
依田真美（2011）「ボランティアツーリズム研究の動向および今後の課題」、『国際広報メディア・観光学
ジャーナル』、12号

